

# ヴェーダ祭式文献に基づくインドの「伝統的」乳加工の再現実験と検証

西村直子

東北大学大学院文学研究科 専門研究員

## 緒言

本研究では、現存するインド最古層の宗教文献であるヴェーダ文献（特に B.C.1200 年頃以降 B.C.6 世紀頃まで）に伝えられる乳加工関連の記述を翻訳・精査し、これに基づく再現実験を通じて個々の乳製品や加工に用いられた材料・道具等の同定を目指した。文献調査を申請者が、再現実験を共同研究者の平田昌弘帯広畜産大学准教授が担当した。これらを踏まえてインドの現地調査を行い、文献調査と実験との結果を現代の乳食文化との関連の中で位置づけてゆくうえでの、一つの視点を示すべく努めた。

古代インドの乳加工については、主に畜産・食品加工学の分野から言及されてきたが、紀元後 5 世紀頃以降の漢訳仏典とその注釈書に負う所が多く、より古いインドの原典に基づく解明には至っていない。近年は文化人類学の分野でも現代に残る「伝統的」乳加工の実態が伝えられるようになった。その際、報告される「伝統」の形成過程は、調査対象となる社会乃至共同体の生活基盤の歴史の変遷を跡づける上で重要であるが、一次文献に直接遡る検証は必ずしも十分であるとは言えない。翻ってインド学の分野からは、仏教教団の生活規定をまとめた律文献を中心に教団の食生活を扱っているものの、乳製品については名称の列挙に留まり、具体的な加工法等への言及を欠く。

文献の精査は乳加工の歴史のみならず、乳製品を重用した社会・共同体の歴史的解明にも寄与し得る。例えば、ヴェーダの文献展開史は、インド・アーリヤ諸部族のインド亜大陸における移住遊牧生活及び定住化の歴史と密接不離の関係にあり、その解明は、当時の牛を中心とした牧畜生活の形態や食生活の実態を明らかにするうえでも必要不可欠である。就中、現代に至るまでインドの宗教・文化に大きな影響を及ぼしたヴェーダの宗教については、今なお多くの問題が未解明のまま残されている。本研究課題はこれらの解明に資することは元より、現代

社会における「伝統」の形成と背景とを明らかにするうえで不可欠な資料を提供するものである。

## 実験方法

①西村がヴェーダ文献該当箇所を翻訳し、②これに基づいて平田が自身の計画・立案によって再現実験を行った。③また、グジャラート州及びパンジャブ州において現代の乳加工について調査した。④上記①-③を総合し、文献の伝承との異同を明確にすべく努めた。

## 結果

紙数の都合により、①及び②の中核的な部分について一例を挙げる。

①翻訳：以下に示すのは、新月祭において「サーンナーイヤ *sāṃnāyā*」（原義は「混ぜ合わせ」）という供物を前日に準備する場面で唱えられるマントラ（祝詞、祭詞）とその解釈、並びに当該マントラ唱誦に伴う作業に関する議論である。*sāṃnāyā* は、前日夜に搾乳・加熱して発酵させた酸乳（ダディ *dadhi*）と当日朝に搾乳・加熱した乳（シュリタ *śṛta*）との混合物。英雄神であるインドラ *Indra*（またはマヘンドラ *Mahendra* 「偉大なる *Indra*」）に捧げられる。これらは祭火に注ぐ直前に混ぜ合わされるため、当時の人々に確認可能な変化は起こっていないものと考えられる。

新月祭・満月祭は、毎月 2 日間にわたって行われる、ヴェーダ祭式の基本形である。新月祭における *sāṃnāyā* 献供の位置づけは、ヴェーダの各学派の間で異なり、時代の推移に伴う祭式全体の整備過程に応じて変化した可能性も指摘される<sup>1)</sup>。本報告ではヴェーダ散文最古層の伝承を含む『マイトラーヤニー サンヒター (MS)』（B.C.1000 - 800 頃）と同学派の祭式綱要書とを取り上げる。マントラ中の「ソーマ *Soma*」は、麻黄 (*Ephedra*) であると考えられる<sup>2)</sup>。インド・アーリヤの

人々がインド亜大陸に進出する以前（インドイラン共通時代）に用いられていたものの、ヴェーダ後期時代には代用植物の使用が伝えられており、入手困難となったものと推測される。祭式綱要書では *dadhi* を添加することを定めており、*Soma* に代わる凝固剤として *dadhi* が用いられていたことが明らかとなった。

◆ MS I 1,3:2,10–11（マントラ、B.C.1000 頃）「*Indra* の為に、君（乳）を、分け前とするべく、*Soma* によって私は固める」<sup>3)</sup>。◆ MS IV 1,3:5,10–12（ブラーフマナ：マントラ解釈と神学的議論、B.C.800 頃）「『*Indra* の為に、君を、分け前とするべく、*Soma* によって私は固める』と [唱える]。当の物（乳）を他ならぬ *Soma* にすることになる。かくて又、このように知りつつ *sāmnāyā* を飲むと、その人によっては *Soma* を飲む事が継続されているのだ」<sup>4)</sup>。◆ 『マナーヴァ・シュラウターストラ (*MānŚrSū*)』I 1,3,34（祭式綱要書、B.C.6–7 世紀頃）「(銅の) 底が冷めたらアグニホートラ *Agnihotra*<sup>5)</sup> の残りである *dadhi* を用いて、『*Indra* の為に、君を、分け前とするべく、*Soma* によって私は固める』と [唱えて] 固める。あるいは『*Mahendra* の為に』と [唱える]」<sup>6)</sup>。

②再現実験：加熱殺菌乳 100g に麻黄圧搾液を添加し、30°C 及び 40°C の設定温度下に静置。12 時間毎に経過観察。圧搾液は以下の手順で採取した:5mm 程度に切った乾燥麻黄 1g、0.5g、0.1g、0.05g、0.01g に蒸留水 5g を添加、15 分後に蒸留水 5g を追加して、乳鉢で 1 分間すり潰した。これをガーゼで濾過し、加熱殺菌乳に添加した。また、麻黄における凝固作用の有無を確認する為、加熱殺菌乳のみと酸乳 10% 添加乳との 2 区画も設け、同様に経過観察した。今回の実験では、麻黄添加後 12 時間が経過した時点での粘度と pH に大きな変化は見られず、翌日に *dadhi*（酸乳）として用いるという祭式手順とは合致しない。麻黄が凝乳作用を持つという確実な証拠は得られなかった。

## 考 察

①翻訳について：マントラでは、*Soma* を用いて乳を凝固させていたことが示唆されている。一方、ブラーフマナからは、*sāmnāyā* と *Soma* とを同一視する観念が議論の背景にあることが窺われる。さらに、祭式綱要書では *dadhi* 製造のために、スターターとなる *ātañcana* を用いる。すなわち *Agnihotra* の残りが自然発酵で *dadhi* になったものを使用することが定められている。これらの伝承の背景には、インド・アーリヤ諸部族の移住による

地理的変化が影響していたものと推測される。②再現実験について：今回は pH と粘度との推移を中心に観察した。麻黄の持つタンニンが凝固を促したという作業仮説を立てたが、明確な証拠は得られなかった。今後、条件を替えた実験に加え、凝固物と分離水分との成分分析も視野に入れて、さらなる観察が必要である。

## 要 約

ヴェーダの古い伝承では、*sāmnāyā* を準備する際に *Soma* を用いて乳を凝固させていたことが推測されるが、後には酸乳や代用植物の使用が明記されるようになった。インド・アーリヤ諸部族の移住に伴う地理的変化によって気候条件が変わり、*Soma* の入手も困難となったことが影響した可能性も否定できない。*Soma* を麻黄に比定する見解に基づいて再現実験を行ったが、今回は乳凝固が麻黄の作用であるとの確証は得られなかった。今後さらなる観察が必要である。

## 謝 辞

本研究に対し助成を戴きました公益財団法人三島海雲記念財団並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 註

- 1) Cf. 西村『放牧と敷き草刈り』36ff. 及び 43ff.
- 2) BROUGH, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*, 34-2, 331–362, 1971 = *Collected Papers* 366–397
- 3) *īndrāya tvā bhāgām sōmenātanacmi*. MS IV 1,3:5,10<sup>p</sup>; *VārŚrSū* I 2,2,32; *MānŚrSū* I 1,3,34. 各学派に類似 mantra のパラレルはあるものの、学派毎に単語・語順等が少しずつ異なる。*īndrasya tvā bhāgām*: KS I 3:27<sup>m</sup> (XXXI 2:2,12 13<sup>p</sup>); *KapS* I 3:4,10<sup>m</sup> (XLVII 2:335,20<sup>p</sup>); *VSM* I 4 (ŚBM I 7,1,19); *VSK(tanakmi)* I24; *KātyŚrSū* IV 2,33. *sōmena tvātanacmīndrāya dādhi*: TS I 1,3,1<sup>m</sup> (TB III 2,3,10<sup>p</sup>); *BaudhŚrSū* I 3:57; *ĀpŚrSū* I 13,1
- 4) *īndrāya tvā bhāgām sōmenātanacmī-īti. sōmam evāinat karoti. tāsyā ha tvāi somapīthāḥ sām̐tato yā evām vidvānt sāmnāyāpībati*. ||
- 5) 毎晩毎朝、熱した牛乳を祭火に注ぐ祭式。元来は太陽の運行を司る目的で行われていたものと推測される。Cf. SAKAMOTO-GOTO, *Fs. Narten, Dettelbach* 2000, 231–252; *Kultur, Recht und Politik in muslimischen Gesellschaften*, Bd.1, Ergon Verlag 2001, pp.158–167.
- 6) *sūtibhūtam agnihotroccheṣena dadhne* ”-īndrāya tvā bhāgām sōmenātanacmī-īty ātanakti. mahendrāya-eti vā.

## 参考文献等

一次文献 サンスクリット語のアルファベット順に略号のみ示す。書誌情報については西村『放牧と敷き草刈り—Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究』(東北大学出版会 2006) を参照されたい。

□<sup>m</sup>: mantra; □<sup>p</sup>: prosa 即ちブラーフマナ; **ĀpŚrSū**: Āpastambha-Śrautasūtra アパスタンバ・シュラウターストラ; **RV**: Ṛgveda リグヴェーダ; **KapS**: Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā カピシュタラ・カタ・サンヒター; **KS**: Kāṭhaka-Saṁhitā カータカ・サンヒター; **KātyŚrSū**: Kātyāyana-Śrautasūtra カティヤヤナ・シュラウターストラ; **TB**: Taittirīya-Brāhmaṇa タイッティリーヤ・ブラーフマナ; **TS**: Taittirīya-Saṁhitā タイッティリーヤ・サンヒター; **BaudhŚrSū**: Baudhāyana-Śrautasūtra バウダーヤナ・シュラウターストラ; **MānŚS**: Mānava-Śrautasūtra マナヴァ・シュラウターストラ; **VSK**: Vājasaneyi-Saṁhitā (Kāṇva) ヴァージャサネーイ・サンヒター (カンヴァ); **VSM**: Vajasaneyi-Saṁhitā (Mādhyandina) ヴァージャサネーイ・サンヒター (マディヤンディナ); **VārŚrSū**: Vārāha-Śrautasūtra

ヴァーラーハ・シュラウターストラ; **SBK**: Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva) シャタパタ・ブラーフマナ (カンヴァ); **SBM**: Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina) シャタパタ・ブラーフマナ (マディヤンディナ)

二次文献 紙数の都合により多くを割愛した。

足立達『ミルクの文化史』(東北大学出版会 1998), 『乳製品の世界外史』(東北大学出版会 2003), 石毛直道編著『発酵乳の文化・生理機能 世界の発酵乳』(はる書房 2008), 石毛直道・和仁皓明編著『乳利用の民族史』(中央法規 1992), 越智猛夫 東北福祉大学紀要 13, 137-147, 1988, 鍋田文三郎『チーズの来た道』(新装版, 河出書房新社 1991), 中尾佐助『NHK ブックス 173 料理の起源』(日本放送出版協会 1972), 西村直子 論集 37, 141-158, 2010 [2011 刊行], 平川彰『山田無文老師喜寿記念: 禅学論攷』(禅文化研究所編), 59-78, 思文閣出版 1977, 平田昌弘 砂漠研究 15-2, 65-77, 2005.